

6年 体育科学習指導案

授業者 望月 拓馬

1. 単元名 「いかに攻め切るか？いかに守り切るか？～ネオホッケー～」

(E ボール運動 ゴール型)

2. 単元の目標

○ネオホッケーの運動目的を理解するとともに、ボールを保持する時のスティック操作とボールを保持しない時の動きによって、ゴールにシュートして得点することを目指す。また、得点されないように、相手の攻撃を防ぐ。

[知識及び技能]

○ゲームの勝利に向かって、自分の動きや自チームの動き方を考える。また、自身の役割を見つけたり、自チームに応じた作戦を考えたりしながら、気付いたことをチームメートに伝える。

[思考力、判断力、表現力等]

○ゲームの勝利を目指す中で、自身の目指す動きを実現しようしたり、他者の考えや動きを認めたりしながら、進んで運動に取り組む。

[学びに向かう力、人間性等]

3. 子どもと教材

(1) 子どもについて

本学級の子どもは、何よりも目的を大切にして活動に向かっていく。その象徴的な姿は、学級で活動の計画を話し合う際に、初めに目的を決める姿である。例えば、実習生を迎える会や相棒の1年生を招待したハロウィンパーティー、修学旅行中の活動などの計画を話し合う際に、内容そのものに多様なアイディアや思いをもっていたとしても、「目的をどうしようか」「目的を決めるのが先じゃん」と声が上がる。そうして目的を学級で共有した上で、一人ひとりがもつ案を出し合い、その活動に向かっていく。おそらくこれまでに、目的をもって向かっていったことで、よりよい手応えや達成感を味わった経験が多くあるのだろう。また、時として悩んだり迷ったりしても、目的が立ち返るものとなって、向かうべきものへの方向性や向かう上での大切なことなどが再確認できたという経験も相まっているはずだ。こうして目的を大切にすることで、子ども一人ひとりが見通しをもつことにつながり、学級がより一枚岩となって、その活動に力強く向かってきたことが分かる。以上のことから、目的を大切にして活動に向かう背景には、これまでの経験に裏打ちされた自信や見通しがあるのだろう。

また、最近ではそうした姿に変化が見られる。実習生を迎える会を例に挙げるならば、以下のようなである。以前であれば「実習生に附属小のことを知ってもらい、たくさん笑顔にしたい」と目的を決めて向かっていく中で「僕は実習生に向けて手紙を作って渡そう」「私は多くの実習生と会話してみよう」「私はドッジボールの時に関わっていこう」など目的に対して「自分は何ができるか、何がしたいか」を考え、実際の活動に臨む様子が色濃かった。しかし最近では「実習生と一緒にみんなでサッカーをしよう」「みんなで実習生を笑顔にするには、自分には何ができるか？」などというように、自分は何がしたいかという視点に加え、「自分たちはどうしたいのか？」「学級として向かう中で、自分はどうすべきか？」という視点ももつようになってきた。これは、目的を軸として集団の中での自分の向かい方も大切にしようという思いがあるからこそ表出した姿なのであろう。このような行動が見られるようになってきた背景には、今年の4月に6年生となり、「最高学年として下級生のお手本になりたい」という願いをもち、集団としてどうあるべきかと自分たちに矢印を向けて、目指す姿を明確にしたことが要因となっているのだろう。また、委員会活動や応援団、グループ活動といった異学年の集団において、集団を引っ張っていく存在になったことも、そうしたあらわれに寄与しているはずである。そこでやり遂げた自信なども影響を与えているのだろう。

このように、「集団の中の自分」に視点を広げながら活動に向かう姿が修学旅行におけるグループ決めでも見られた。「一人ひとりの意見を大切にしながら、みんなで最高の修学旅行にする（こと）」を修

学旅行の目的とした子どもは、その言葉に立ち返りながら、ともに活動するグループを決めていった。たとえ自分のグループが決まりかけても、そこで満足するのではなく、常にみんなが納得するまで全員で話し合いを進めようとした。「他グループはどうかな?」「意見を言いたくても言えずに困っている人はいないかな?」と周りに目を向けていたのである。さらに、実際に困っている友達を見つけると、一度決まりかけていたグループのメンバーを再考しようと提案したり、修学旅行実行委員ではない子であっても、イニシアティブをとって友達に働きかけたりした。その活躍もあって、より自分たちが納得のいくメンバー構成に近づけていくことができたという実感をもって修学旅行に向かっていった。

子どもは今、変わろうとしている。集団の中の自分として活動に向かっていこうとする姿が顕在化している。そのような子どもの今を、私は過渡期と捉えている。そしてこの過渡期にある子どもを全力で支えたいと考えている。なぜならば、子どものこうした今を支えることは、自分も他者も大切にし、よりよいものへ向かっていくことに、自信をもって踏み出すきっかけとなると考えているからである。そうしていく中で、自分を磨いていくことも、集団で創り上げていくことにも、さらなる価値を感じ、互いに切磋琢磨しながら、その後の未来にあゆみを進めていってほしいと願っている。

(2) 教材について

- ・ゲームの時間内により多くのゴールを決めたチームが勝利となる。
- ・1チームの人数は5~6人であり、そのうち3人が攻撃、2人が守備とする。
- ・1ゲームを6分で構成する。内訳は以下の通りである。
 - 【1回の表：1分 - 1回の裏：1分 - インターバル：2分 - 2回の表：1分 - 2回の裏：1分】
 - ・表と裏で攻守が入れ替わるが、1ゲームを通して同じメンバーで攻撃、守備を行う。
 - ・コートはハーフコートで、周りに壁が張り巡らされている（図1-2）。
 - ・ボールは玉を使用する（図1-3）。
 - ・両サイドにある2か所のセーフティゾーンは、攻撃側のプレーヤーのみ入ることができます。
 - ・ゴールエリア（ゴール前の半円）には、すべてのプレーヤーが入ることができない。
 - ・安全面を考慮して反則プレーを設定する。
 - ・ハイステイック…ブレード（スティックの打つ部分）を、膝の高さよりも高く振り上げる。
 - ・チャージング…故意に相手にぶつかる。
 - ・クラッシング…スティックで相手の体やスティックの動きを阻害する。
 - ・キッキング…ボールを故意に足で蹴る。それ以外に触れてしまった場合は、インプレーとする。
 - ・スライディング…フロアに手やひざをついたり、寝転んだりする。

図1 ネオホッケーのルール

本单元で扱うネオホッケーは「ボールを相手ゴールに運ぶこと、ボールを自チームのゴールに運ばせないこと」を運動目的としたゴール型のボール運動である。子どもがこれまでに経験してきたゴール型のボール運動には、ハンドボールやサッカー、バスケットなどが挙げられるが、ネオホッケーは今までの運動とは大きく異なる点がある。それは、自分の手や足で直接ボールを扱うのではなく、スティック（図1-4）を使ってボールをゴールに運ぶ、あるいはゴールに運ばせないという点である。大半の子どもにとって、ネオホッケーは初めて出合う運動であるはずだ。そのため、ゴール型のボール運動でしばしば見られる生活経験による技能の差が少なく、同じ出発点から運動に向かっていけると考える。その中で、誰にも活躍のチャンスがあり、徐々に上達していく実感を、みんなで分かち合いながら動きを高め合うことを願っている。ネオホッケーに出会つ

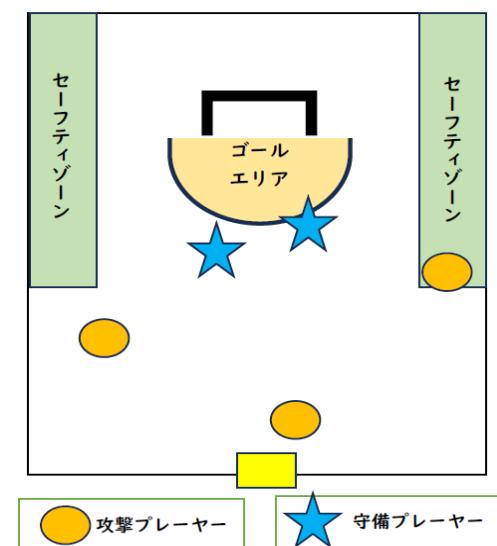


図1-2 コート図

た子どもが、最初に向き合うと考えられる壁は、スティック操作の難しさである。そこで、一人1本のスティックを持ち、個の動きを高めていく時間をチームごとに確保することで、ドリブルやシュート、パスなどの動きに十分に慣れていくことを考えている。

また、子どもが思考した動きの実現を支えるための手立てとして使用するボールは、玉入れの玉（図1-3）を選定した。この玉は、本来のネオホッケーで使用される公式球と比較して大幅に反発力が少ないことにより、ボールを受ける時にブレード（スティックの打つ部分）に納まりやすく、その後のパスやドリブルもしやすいという利点をもつ。さらに、この玉は公式球に比べて浮きにくいという特徴がある。ボールが浮かずに体育館のフロア上を滑って移動するということは、初めてネオホッケーに出会う子どもの不安を和らげるものになるだろう。

直径8cm

さらに、子どもが運動目的にふれた動きに思考を巡らせるることを願って、攻撃側の人数を1名多く設定した。これにより数的優位な状況が生まれることで、攻撃面においてより多面的に思考を巡らせてほしい。加えて、守備側が入ることができない「セーフティゾーン」を設置する。そうすることで、空いているスペースを見つけたり、パスの出しどころを吟味したりする場として、攻撃の選択肢を広げていくはずだ。

最後に、ゲーム時間の設定である。ネオホッケーでは、1分間ごとの攻守の入れ替え（表裏の攻撃）を2回くり返すことで1ゲームとする。さらに、同じ対戦相手とのゲームでは、チーム内の攻守は入れ替わらない。そのようにすることで、同じメンバーで自分たちの動きに目を向けながら共有を図ることができる。その中で、1回目の表裏の攻守によって得られた成果や課題を、ピリオド間に設定された2分間のインターバルによって共有し、直後のピリオドで動きを試していくことができる。そうしたOODAループの流れのもとで、自分や自チームの動きを変えていくことを願っている。

ネオホッケーという経験をしたことのない未知の運動に出会うことで、子どもはスティックによるボール操作の難しさや連動のうまくいかなさなど、様々な壁と向き合っていくだろう。しかし、自分を磨き、集団で目的に向かっていくことを大切にしている今の子どもだからこそ、自分の動きや自チームの動きを高めたり、ともに学びに向かったりするプロセスに価値を見出してほしい。そうした姿は、運動への関わり方を変えていく姿であり、自分と他者とを大切に学び進めたあらわれといえるだろう。



図1-4 使用するスティック

4. 本単元における『その子らしく学ぶ』～本単元で願う『心の動きを伴う経験によってその子に還るもの』～

ネオホッケーと出会った子どもは、自分がこれまでに経験してきたゴール型の運動との相違点に目を向けながら進んでいくだろう。その中でも、スティック操作は子どもにとって馴染みのないものであるはずだ。そこで、どの子も思い通りのパスやドリブルを実現できるように、単元序盤はドリル練習やチーム内練習などの時間を設定する。これにより、子どもがストロークの強さやボールを運ぶ感覚などをつかんでいけるよう試行錯誤する姿を支えていきたい。そして、スティック操作に少しづつ手応えを得てきたところで、子どもは相手の守備がいる中でのドリブルやパスといったプレーに壁を感じるであろう。ドリブルに自信があり、シュートまで一人で持ち込むことを考えていた子どもであっても、ボールや攻撃の動きに合わせて動く守備の存在によって、なかなかゴールに結びつかないこともあるだろう。そうした中で、パスを受ける場所やシュートまでの流れなどについて、チームメートと共有を図っていくはずである。そうした姿の積み重ねで、イメージしたことの実現に向けて試行錯誤を続けていくことを期待している。

単元中盤以降は、3人（攻撃）対2人（守備）のゲームを行っていく。子どもはこれまでに、チーム内、チーム間で2人（攻撃）対1人（守備）のゲームを行ってきてはいるものの、守備が2人になることによって、攻撃側はスペースが少なくなることに苦戦し得点が生まれにくくなるであろう。一方で、守備のプレーヤーにとっても、人数が増えたとはいえ、数的不利な状況やセーフティゾーンの存在によって失点を重ねてしまうこともあるかもしれない。これらの壁に対して、2人対1人の動きの手応えをもとに、守備のズレをついたポジショニングやゴール裏のスペースにも目を向けた動き、シュートを打つ役割やそのタイミングなど、連動した攻撃により注目していくだろう。スペースをうまく活用しよう

とする子どもは、守備のズレを利用できるように、チームメートとの動きを共有したり、保持した後の状況判断をよりよくしようとドリル練習に立ち返ったりする姿もあるかもしれない。一方、守備では、守る際の体の使い方を共有したり、ボール保持者に向かう人とゴールエリア前でシュートコースを塞ぐ人といった役割分担をしたりと、連携した守備に目を向けていくだろう。あるいは、相手の攻撃に合わせて、ポジションを変えていく姿もあるかもしれない。このように、守備の場面においてもチームメートとの連携によって、向き合っている壁を乗り越えていこうとするはずである。

単元の終盤には、ネオホッケー大会を設定する。第①時のネオホッケーとの出合いから、これまでに何度も壁と向き合っていったことで磨いた動きや得られた気付きを積極的に試したり共有したりする時間となってほしい。チームの一員として自分の役割を把握すること、チームとして目指す連動を共有することなどを通して、得点を狙ったり、失点を防いだりする楽しさを存分に味わっていってほしい。その中で、チームとしての動きの高まりに達成感を感じるとともに、自身や自チームの成長を実感することを願う。

このように、チームメートと協同し、自分の動きや自チームの動きを高めていくことに手応えを伴った価値を見出していってほしい。そして、その動きの更新に達成感を味わっていってほしい。こうしてチームメートとともにやり遂げてきたことは、集団の中の自分として大きな自信となり、その行く先には自身の生き方につながる価値観の更新も見えてくるだろう。

5. 単元構想（全9時間扱い／本時Ⅰは第④時・本時Ⅱは第⑥時）

＜教師の投げかけ＞ 子どもの表れ 最終時における子どもの表れ

① <スティックとボールを使ってネオホッケーをしよう>

- ・ゴルフみたいに、ボールを打つ運動じゃない？
- ・アイスホッケーの試合でこういうスティックを見たことがあるよ
- ・とにかくボールを打ってみたいな

＜チームごとにドリブルやパス、シュートをしてみよう＞【チーム内練習】

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| ・思ったところに飛ばすことができないから難しいな | ・ドリブルで抜きたいな |
| ・強めにストロークすると、チームメートのところまでパスできた | ・いろんな強さでストロークしてパスしてみよう |
| ・シュートが決まると嬉しいな | ・思い切り打つゴルフとは違って、押し出すようなストロークが大切だ |
| ・パスがつながると嬉しいけど、ストロークの強弱が難しかった | |
| ・次は、パスをもらってからシュートをしてみたいな | |

② <チームでウォーミングアップ練習をしよう>【チーム内練習】

- | | |
|----------------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| ・ドリブルは難しいけど、スティックを引きずるようにしたら、できるようになってきたよ | ・ドリブルに慣れてきたけど、ドリブルからそのまま打つシュートは難しいぞ |
| ・動いているチームメートにパスをするのは難しいな | ・シュートコースのある所まで持ち込んでシュートをしよう |
| ・私は、思ったところにパスができるようになってきた。でも、ドリブルしながらだと、パスがうまくつながらないからもっと練習したい | |
| ・相手がコーンだったから、シュートまでいけたけど、次は人が相手だったら、ここまでうまくいかないと思う。でも試してみたいな | |

③ <2 on 1 ゲームをしよう>【チーム内ゲーム】

- | | |
|----------------------------------------------------|-------------------------------------------|
| ・焦るとボールを受け止められないから、落ち着いてボールを見よう | ・相手がコーンの時より面白そうだ |
| ・パスがつながるとシュートまでいきやすいな | ・味方にパスしなくてもゴールを決められそう。大事なのは相手をかわしながらシュートだ |
| ・すぐシュートを決められてしまう。N男と協力して守ろう | ・シュートしやすい場所で、パスをもらったらうまくゴールできたぞ |
| ・相手がいると、ボールを取られないようにと考えてしまつて焦ってしまった。パスをつなぐことを意識したい | |
| ・相手にパスカットされないように、2人でうまくパスをつなぐと、ゴールに近づけたよ | |

（本時Ⅰ）④ <相手チームと2 on 1 ゲームをしよう>【チーム間ゲーム】

- | | |
|-----------------------------------------------------------------|--------------------------------------|
| ・この前の時間と同じように、パスをつなげるようにしたい | ・今日もゴールを決めたい。ドリブルシュートを狙おう |
| ・相手の守備がうまくてボールをすぐに入られてしまった | ・相手の守備がうまい人だと、ゴールを決められない。どうやって攻めようかな |
| ・1回だけ、止めることができたぞ | |
| ・相手チームに負けてしまったけど、パスがつながって惜しいシュートまでいくことができたぞ。ゴールを目指すためのパスが大事だったな | |
| ・相手の守備がうまくても、ゴールを決められるようにしたい | |

○教師の働きかけ

○第①時前半では、スティック操作に自信がもてるよう、1人1本のスティックを用意して、スティックとボールに自由に関わる時間を確保する。

○子どもが安全面に配慮した上でスティック操作に慣れていけるように、反則となるルールを丁寧に伝える。

○ネオホッケーのゲームについて具体的なイメージがもてるよう、実際の映像を紹介する。

○A 子がスティック操作に自信をもてるよう、たくさんボールと関わる練習を紹介していく。

○第③時からは対人プレーも出てくる。子どもが安心してプレーできるように、スティックを膝より振り上げないというルールを再度伝える。

○2 on 1 ゲームでは、守備が1人のため、動きに自信のある子どもがいる場合には、守る際の立ち位置や体の使い方について問い合わせ、チーム内に共有できるようにする。

○第③時では、自分たちのプレーに目を向け、運動目的の達成に向けた動きの共有ができるよう、チーム内ゲームを行う。また、作戦盤やiPadを用意して、必要に応じて子どもが使えるようにする。

○B 男がどのようなプレーを目指しているのかを把握できるように、プレー中の弦や指示、実際の動きなどに注視していく。

⑤<参加人数を増やして、3 on 2 ゲームをしよう>【チーム間ゲーム】

- ・相手が2人だとすぐに取られてしまう。スペースを見つけよう
- ・K 男がボールをもつたらパスをもらうようにしよう
- ・役割を決めて、一緒に相手の攻撃を邪魔しよう
- ・味方が3人になったから、もっとゴールを決められると思ったけど、相手も2人いたので、たくさんボールを取られてしまった
- ・もっとゴールを決めたい。そのための作戦を考えたい
- ・守備でボールをたくさん取れたけど、ゴールを決められたときは悔しい

(本時Ⅱ) ⑥<前回のゲームを振り返りながら、チームで練習をしよう>【チーム内練習】

- ・K 男からパスをもらえば、シュートも打てそうだ。やってみよう
- ・前回はたくさん失点した。2人で守るために守備の練習をしたい
- ・ボールをもっていない選手をマークしてみよう
- ・前回の授業の時のゲームで、全然できなかつたことが少しできた
- ・セーフティゾーンを使う作戦を共有した。次も試したい

⑦<どうしたらゴールを決められるかな?>【チーム間ゲーム】

- ・シュートを打てるようドリブルで進むよ
- ・ドリブルのうまいM 男からパスをもらって打ちたいな
- ・ボールをもらうのは相手のマークが来ないところだよ
- ・ゴールは決められなかつたけど、仲間からボールをもらうことができた
- ・今までよりもいろんな攻め方を試すことができた

⑧<大会に向けて、自分たちの得意なプレーを見つけよう>【チーム間ゲーム】

- ・N 男のドリブルを生かして攻めたいから、N 男にゴール近くまでドリブルをして攻めてもらおう
- ・やつた! シュートを打ちやすいパスを出してくれたからゴールを決められたぞ
- ・チームメートとパスをつないで、シュートまでいけた。次の試合でも、パスがつながるよう、空いているスペースに走りこもう
- ・守備では、1人がゴールエリア前に残って、1人がボールを追いかけると相手が困っていたぞ。次回も試してみよう

○A 子が理想とする動きの実現に悩んでいる時には、現状の動き方を振り返られるように、かかわりながら支えていく。

○B 男が思うようにゴールが決まらず悩んでいる場合は、パスの有効性を伝えたり、オフザボールの動きと一緒に考えたりしていく。また、チームメートと関わる場を意図的に設定していく。

○第⑥時は、前時を踏まえて、うまくいかなかつた動きやチームメートの動きにも目が向くように、チーム内で動きを試した上で、チーム間ゲームを行う。

○A 子が、自分とチームメートとの動きに、より思考が向くように、連動している子どものプレーを映像で紹介する。また、A 子の理想とする動きをもとに、チームで動き方を練り合えるように、共有する場を設ける。

○B 男が、チームメートとの連動を図るプレーを試しているときには、その向かい方に自信をもてるように、その姿を価値付けていく。

○運動目的の達成に向け、連動した動きの実現を目指す子どもに、チームの目指す動きが明確になるように、動きの言語化を支えていく。

○攻撃の連動に実感をもてるよう、チームに応じて、ドリル練習を提案したり、子どもの試合映像を見せたりする。

- ⑨<ネオホッケーあゆみンピックを開催しよう>【チーム間ゲーム】
- | | |
|-------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| ・この前はうまくいかなかった、アシストパスをやってみたいな | ・ゴールの後ろからパスするよ。僕がドリブルしたら、ゴール前に走りこんで |
| ・よし、T子が相手のいないところにいてくれたから、思い通りのアシストパスができたぞ | ・1人はボールに、1人はいつもゴールエリアの前にいるっていう守りにしたら簡単にはシュートをさせなかつたよ |
| ・Y男とバランスよくポジションを考えられたからたくさん守れた | |

- 最初はスティックでボールを動かすことが難しいと思ったけど、慣れていくとパスやシュートなど、できる動きが増えて嬉しかった
- パスをたくさんつなぐと、シュートコースができてゴールしやすい。だから、チームメートとのパスをうまくつなぐことが大事だった
- 得点はできなかつたけれど、対戦相手の攻撃をたくさん防ぐことはできた。一緒に守るチームメートと協力して守れたと思う
- Y男は周りをよく見ているんだな。チームのポジションって大事だね
- 動きながらもらおうとしたら、相手の守備はついてこれなかつた。この動きで、パスを受けられたのは忘れない
- 1点取るのが難しかつたけど、チームで協力して1点取れたときはうれしかつたな。みんなで取つた得点って感じがしたよ
- 2人で守るのは大変だったけど、N男が指示してくれたポジションでパスカットができた

○チームでの動きの成果を実感できるように、得点に関わらず、連動したプレーをゲーム中に意識している子を称揚していく。

○B 男が自身の得意なプレーをチームプレーに組み込めるように、作戦を立てる際にかかわっていく。

○A 子が自分のプレーや自分たちのプレーに自信をもてるよう、連動が垣間見える A 子たちのプレーを称揚していく。